



ようこそ

雨の世界

SPIRAL MOON the 46th session

2023. 6/14 [WED] → 6/18 [SUN]

下北沢「劇」小劇場

作：雨々アメ(仮) (ウテン結構)

演出：秋葉 舞滝子

雨の館に。

上演チラシ (デザイン・印田彩希子 / 画・秋葉陽子)

ウテン結構 © 雨々アメ(仮) 執筆作品

『雨の世界』

改訂版・男の子バージョン

SPIRAL MOON the 46th session にて上演のもの原形。

ご挨拶に代えて（ウテン結構での初演の、チラシ用原稿を改稿した文章です）

私は、精神分析寄りの発想をすることが多くて、つまりは過去や歴史というものを信じていないことになりま
す。目の前にそれ（過去）がない以上、それ（過去）は存在しない。ないものはないって考え方です。それじ
や私たちが過去と呼んでいるモノは何かと言うと、語る度、思い出す度にその都度、語り手の中で捏造される
「物語」に過ぎないと考えるのが、精神的には普通だと思います。ところが、作家としてはその「物語」
ってヤツが大事だったりするので。大事だし、好きだし、日々いつもその「物語」に對峙している自覚が私
にはあります。そして、今書いてきた2つを重ねると、「過去という嘘を嘘のまま愛している」みたいになる
ような気がします。嘘であることは然したる問題じゃない。もちろん真実であることも。ただただ物語が物語
られることが、私には（そして、実はみんなにとって）とても大切なのだとそう思っているのです。さて、
もし良かったら、私にあなたの過去のエピソードを聞かせて下さいませんか。もちろん私はその話を信じない
とは思いますが、ごめんなさい、でもとても大事にすると思います。もしかしたら、あなた自身よりも大事
に。そしてそれが、次の作品のアイデアになるかも。今回は、雨の世界、です。実は今回は、ある方へのイン
タビューから台本が書かれました。有名な？ある雨男の人です。雨男（雨女）って、そういう仕組みなのか
あ、と目から鱗でした。見上げれば上空には線状降水帯。嘘か、真実か、それは分かりませんが、ウテン結
構、2022年の復活公演の為に書き下ろし、2023年、今度はSPIRAL MOONさんにも発表していただきま
す。なんと、演出家の秋葉舞滝子さんからの提案で、女性4人芝居を、男性4人芝居バージョンへ。はい、そ
ちらの改訂版を書きました。女性版も、同じと言えば同じですが、細かく書き直しさせていただいています。
さあ、物語が雨と雷鳴と共に動き始めます。では、劇場にてお待ちしております。雨々アメ（仮）

『雨の世界』 作◎雨々アメ（仮）

登場人物◎

- 男1（訪れた男・四郎）／女2（友達・真理子）
男2（家主・丈一郎）
男3（友達・楠）
女1（友達・聖子ちゃん）／男4（弟）

○場面1 ―プロローグ―

（強い雨と風の音。その中を、傘を差し、その傘を風に持っていかれながら、それでも必死に前に進む男1の姿が。最初は風にかけているが、どうにか工夫して、なんとか前進する。もしかして傘は邪魔になって、とうとう捨ててしまうかもしれない？ 身体表現。

どこからともなく、「ハッピーバースデー」の歌が雨風に紛れて聞こえる。きよろきよろするが、雨の音に掻き消えて、もう聞こえない。

暗転。

「雨の世界」

再び照明が入ると、森の中に一軒だけポツンとある古い家の玄関ドアの前に、男1が辿り着いている。そのドアを、激しく叩きながら。）

男1 すみませーん、すみませーん。あのー、どなたかいらっしゃいますかー。すみませーん。（強風）うわっ。あのー、すみません、雨で、なんか凄くて、あのー。

（雨風と共に、陰鬱な音楽が聞こえる。その中、一旦、溶暗。

大きな扉を叩く音に続いて再び照明が入ると、開け放たれたドアの前に倒れている男1と、家の中からドアを開けて現れた男2が立っている。男2はフードをかぶっていて顔が見え難い。しかも、その話し方から「老婆」のように見えている。）

男2 ようこそ、雨の館に。おや、おやすみになっておられる。じゃ。

男1 （目を覚まし）待った！（起き上がりながら）おやすみに、なっておられません。今、力尽きて。

男2 ああ、すごい雨風（あめかぜ）ですものね。

男1 命からがらここまで。

男2 それはそれは。

男1 大袈裟じゃありませんよ。下の道、川との境目がぜんぜん分からなくなって、実は僕もペーパードライブで、運転慣れてないので、あのまんま走ってたら絶対川に流されるって。

男2 もうすでに何台か。

男1 えっ！

男2 ニュースでやっていましたよ、只今空の上では、タイが居座っている。

男1 鯛？

男2 線状降水帯、がずつと居座っていて、この辺りでは大変な被害が。

男1 そ、そうなんですか！ ったく、天気予報じゃこんなに降るなんて言っていなかったのに。

男2 アメリカで蝶々が羽ばたけば日本の天気も変わると言いますしね。

男1 ああ、バタフライ効果ですね、聞いたことが。一体どこでそんな蝶々が羽ばたいたんだ。ニューヨーク！

男2 さあ、どこでしょう。サンフランシスコとか。では、ごきげんよう。（ドアを閉めようとして）

男1 ちよいちよい！ 何でドアを閉める！ まさか世間話する為に訪ねた訳ないでしょ。

男2 違いましたか。

男1 見りや分かるでしょ。今までの話聞いてました？

男2 何でしたっけ？

男1 記憶力！ あのですね、助けて下さい。どうか雨が上がるまで、しばらくこの家に避難を。

男2 避難。ああ、気がつきませんすみません。

男1 で、いいですか？

男2 実は中ではパーティーの真っ最中で。

男1 パーティー？ ああすみません、そんな時に。でも僕死にそうなので、あの、邪魔にならないように隅でちつちやくなってますから。

男2 邪魔なんてそんな、こちらはぜんぜん構いませんのよ。

男1 じゃ、いいですか？

男2 それでは、これからお客様をお迎えする準備を。（ドアを閉め、中に一回消えようと）

男1 準備いいから！ いや、準備大丈夫です、つか話長い、今すぐ中に、状況見て、お願い！

男2 ええ、ええ、それはもう、もちろん。どうぞ、どうぞお入りを。

男1 あつ、ありがとうございます！

「雨の世界」

(二人、家の中に入り、ドアを閉めると、静寂というほどではないが、雨風の音がパツと遠くなる。)

男1 わつ、暖かい、天国。

男2 まだ生きてますよ。

男1 生きて？

男2 ここは天国ではありません。

男1 あつ、いえ、はい、ほんと命拾いました。ありがとうございます。

男2 コートはこちらに。

男1 すみません。

男2 タオルはこちらのをお使いください。

男1 うわつ、すみません、至れり尽くせり。

男2 何か温かいものもお持ちしましょうね。

男1 ええ！ うわつ正直助かる、すみません、本当。

男2 少々お待ちを。

(その前に、男2、舞台中央のドアがストーリー上もう邪魔になったので、押して片付ける。)

男1 あの、何を。

男2 今部屋広くするから。(ドアを上手側へ押して移動) はい。

男1 広くなった！

男2 では、少々お待ちを。

男1 (急に思い至り) あれ？ パーティーは？ (きよろきよろ)

男2 ああ、お気になさらずに。(会釈)

男1 そっか、これからなんですかね？

男2 少々お待ちを。(姿を消す)

男1 ……、(部屋の奥に向かって)ほんと、最近こういった異常気象、むっちゃ増えましたよね。台風でもないのに、すごい降ったりして。やっぱり地球温暖化の影響なんですかねえ。

男2 (出てきて)はい、どうぞ。(カップを渡す)

男1 ありがとうございます。(カップを受け取り)

男2 (ワntenポ遅れて)…ん? 何かおっしゃいましたか?

男1 えっ? ああ、地球温暖化の影響かなって。

男2 そうですね、私も温泉は好きです。

男1 いや、あの。

男2 それよりも足を見せてご覧なさい?

男1 えっ? 足湯ですか?

男2 何の話です、コートがあんなに破れて。怪我をなさっているのですよ?

(見ると、確かにコートの下の方が破れている。)

男1 ああ、いえ、大した怪我では。坂で滑って転んでしまって、膝小僧を擦りむいちゃって。

男2 まあ大変。

男1 でも、ツバ付けときゃ治るレベルで。

「雨の世界」

男2 消毒くらいした方がいいですよ、万が一破傷風にでもなってしまったら。

男1 そんな、大丈夫ですから。

男2 もう消毒薬持ってきちゃいましたし。(持っている)

男1 ほんと、膝小僧なんて、子供の頃からしょっちゅう。

男2 破傷風の致死率は10パーセントから20パーセント。

男1 えっ、ああ、じゃ、すみません、色々。

(男1、椅子に座ると、膝を出す。)

男1 ほら、大したことない。

(老婆の姿の男2、ガーゼなども使いながら、そこに消毒液を。)

男1 おっ、うおっ！

男2 しみますか？

男1 い、いえ、大丈夫です。

男2 何で膝小僧って言うのかしらね。

男1 はい？

男2 ここ。

男1 ああ、あっそれは、(しみた) うおっ！、・・確か日光の方のお寺にある銅像の膝に、象さんの彫刻が彫られていたとかで。

男2 象さん？

男1 ええ。

男2 エレファント。

男1 そうみたいっす、僕も最初聞いた時はびっくりしちゃいました。まさか動物の方の象だったとはって。あ
あ、ありがとうございます。包帯は自分で。

男2 じゃ、はい。(手に取っていた包帯を男1へ)

男1 ありがとうございます。

男2 えっ、何かおっしゃいました？

男1 いえ、包帯ありがとうございます。

男2 ほうとうが好きなんてよく分かりましたね、子供の頃は山梨に住んでいた時期もあり。

男1 いや、ほうとうの話ではなく。

男2 ホーリーローームシツク？(心配そうに)

男1 いや、あの、そうじゃなく、えっ？ お婆さん、もしかして耳が？

男2 耳は良いです。むしろ地獄耳と言われています。特に自分の悪口は1キロ先でも聞き分けます。

男1 そりゃすごい。

男2 ああ、それとわたくし、(一回咳をして) お婆さんではありません。

男1 えっ？

男2 ほら。(フードを取る)

(場が変化する効果音。男2、男に戻る。)

男1 えっ、あれ？ 男の、人？

男2 いやいやいや、フード越しでも顔くらい見えてたでしょーに。

「雨の世界」

男1 いや、でも全体的な雰囲気だ。

男2 だいたいお婆さんって、まだ意外と若いんだけどな、見たところあんたと大して違わない気が。

男1 えっ、でも、だって、今まで喋り方だっ！

男2 ああ、なんか飲まれるタイプなんだよね、実は。

男1 飲まれる？

男2 雰囲気とか、こんな嵐の夜、林の中の洋館、遭難して訪ねてきた予期せぬ来客、あーもう、飲まれちゃって飲まれちゃって。

男1 ま、紛らわしい。

男2 いやー、ごめんごめん。

男1 実はこっちだって、意外とビビってたんですからね、確かに嵐の中、辿り着いた森の中の一軒家に老婆がつて、なんかホラー寄りのあれかなって。

男2 はははは。

男1 笑い事じゃありませんって。

(大きな雷鳴。)

男1 わっわっ、わっ、落ちた！

男2 っ、かなり近かったみたいだな。

男1 大丈夫ですかね？

男2 さあ、心配しても仕方ないし、ああ、海老フライって言います。

男1 海老フライ？

男2 自己紹介だよ、俺の名前、まだだったなって思って、海老フライ丈一郎、よろしく。

男1 え、海老フライ？ いや、あの、失礼ですが、それ本名ですか？
男2 本名だから仕方なく受け入れているんだよね。
男1 ああ、なんだか、驚いてしまつて、すみません。
男2 佐村河内さんとか、小保方さんとかつているでしょ。
男1 ん？ 何の話ですか？
男2 知らない？ 佐村河内さん、耳が聞こえないつて言つてサングラス掛けてた変な人。
男1 そりや知つてますよ、作曲で詐欺働いた。
男2 ああいうさ、珍しい名前の人つて、実は数奇の運命を辿るつて思つてるんだよね。
男1 はあ。
男2 んで、海老フライつて家に生まれたが最後、自分も数奇の運命を辿るつて思つてるつてわけ。
男1 ああ、えつと、はい。
男2 あなたは？ イカ焼きとか？
男1 イカ？ いや、いたつて普通で、えーと、篠田四郎つて言います。
男2 いいね普通、四郎君ね、んじや、よろしく。
男1 はい、えーと、海老、海老・・、丈一郎さん、あらためまして、今夜はありがとうございます。
男2 四郎君は、お仕事は？ 何してる人？ あつ、まさか、もしかして、憎き(につつき)働かなくつても生きて行ける身分の人とか？
男1 (笑) 憎きなんですか？
男2 そりや。
男1 じゃ、握手で。(笑)
男2 おつ。(握手) なんか、勝手なイメージだと医者とかかかつて。
男1 うわつ、医者、マジっすか。

「雨の世界」

男2 なんとなくね。

男1 実は僕、医者を目指して勉強むっちゃしてた時があるんですけど、んー、やっぱ金持ちじゃないと上には行けない世界で、結局断念、あつ、ウチ貧乏で、まあ頭の問題かもしれないませんが。

男2 へー。なんで医者なんか？

男1 実は精神分析にはまった子供時代がありました。

男2 精神分析、子供時代に？ 変ってるね、フロイトとか。

男1 ええ、そうですね。

男2 夢診断！

男1 よくご存じで。

男2 別に名前だけだけど、昔エディプスコンプレックスとか流行ったよね、なんであんなもんが流行ったんだろ。

男1 ですね、息子が父親を憎むのは母親を愛しているから、ってやつですね。

男2 そんなことある？

男1 さあ。

男2 確かにマザコンって多いけどさ。

男1 さあ、どうでしょうか、断念しちゃったんで今は。

男2 あのさ、精神分析のことはぜんぜん分からないけど、オイディプス（エディプスと同一人物）って、物語の方ね、確かに知らずに父親を殺して、母親と結婚しちゃうけどさ、あれって本当は、オイディプスに掛けられた呪いじゃなくて、お父さんのライオスに掛けられた呪いだったんだよね。

男1 ああ、ギリシア悲劇ですよ。

男2 そう、なんかさ、オイディプスが苦しむの、可哀相な気がして。

男1 そう考えればそうですね。

男2 親が元凶なのに、親の因果が子に報い、みたいな、精神分析の方はぜんぜん分かんないんだけどさ。

男1 いえ。僕も本当にもう。

(大きな雷鳴。)

男1 わっ、怖っ、これってさつきより。

男2 ほんとにね、なんか、ごめんね、まさかここまで酷い雨になるなんて思わなくてさ。

男1 (しばし沈黙し) あれ? えーと、まるで雨を降らせているのが自分みたいなの。

(男1にキーンって頭痛がやってきて、ふっと消える。)

男1 い、痛っ・・・

男2 えっ、大丈夫?

男1 あっ、ああ、お気になさらずに、時々なるんです。はい、もう大丈夫。

男2 なら、良かったけど。

男1 まさか・・・、いやなんでもありません。

男2 えっ、気になる、なになに。

男1 いや、あの、まさか、ですけど、まさか丈一郎さんがこの雨を降らせてるんですか?

男2 ま、さ、か。(急に下手な芝居で)

「雨の世界」

男1 えっ、急にぎこちない。

男2 そ、ん、な、は、は、ず。(下手な芝居で)

男1 分かりやすい動揺。

男2 は、は、は。

男1 まさか、雨男、なんですか？

(雷。)

男2 ど、どうしてそれを！

男1 いえ、ちよつと思いついただけで、実は僕の友達にいるんですよ、一緒に出掛けるとかなりの高い確率で雨を降らす女の子。

男2 雨女か、お気の毒に。

男1 実は友達つて言うかその子昔の彼女で、なんかデートの度に雨だから嫌んなっちゃって。

男2 それが原因で別れたとか？

男1 えっ、そんなわけ。

男2 いや、あるな、雨男や雨女はそういう扱いを受けやすいんだよ。

男1 ー、まあ少しは、あるかもしれませんが。

男2 可哀相に。

男1 いや、でも本当、それだけじゃなくって色々とありまして。

男2 人間と妖怪の間にはふかい溝があるんだよ。

男1 妖怪？ 雨女が？

男2 雪女と似てるだろ、カタカナのヨしか違わない。

男1 カタカナのヨ？ ああ、いや、妖怪じゃないでしょ、雨女なんて、普通にいますよ。

男2 まあ、妖怪は冗談だけど、でも扱いがヒドイ時があるのは事実だよ、それを理由に異性に去られたり。

男1 いや、本当、それが理由なんかじゃ。

男2 お、俺の話だ・・・(泣く。分かりやすく落ち込む)

男1 あっ、す、すみません。(誤魔化すように話題を変えて) あっ、ああ、でも、さっきの老婆の姿は、けっこう妖怪入ってましたね。

男2 ま、けっこう頑張ったからな、練習したし。

男1 頑張つて、練習？ ああ、なんか、けっこう面白い方なんですネ、丈一郎さんつて、なんかホツとしました。

男2 面白い？ どこが？

男1 なんか、全体的に。

男2 ー、自分ではよく分らんが、ああ、雨男に話を戻すとだな、これは自分にとっては呪いなんだよ。

男1 呪い？

男2 正直、雨男のせいで人生なーんにもいいことなかった。四郎君が雨のせいで彼女を捨てたように、俺も雨

男のせいで恋愛はずっと失敗続きだしな、マジで。

男1 そう、なんですネ。

男2 マジで。

男1 分かりました。

男2 さすがにもう、あきらめもついているけどネ。

男1 えっと、なんだか、すみません。

男2 君に謝られてもな、昔の話だしな、んー、でも、ここまで話しちゃったし、もうちょっと付き合ってもらおうかな、この話題に。

男1 この話題？

男2 雨の世界だよ。

(音楽)

男1 雨の・・、雨男の話ってことですか？

男2 俺が雨男になった日の話だよ。

男1 えっ、雨男って、なるものなんですか？

男2 んー、まあ本当は子供の頃からそうだったんだけど、でも、ある日、ハッキリと、自分が雨男になっちゃった日っていうのがあるんだよ、俺には、そんな苦い思い出が。

男1 苦いんですか？

男2 そりゃ、やったー、自分は雨男だ！って訳にはいかないだろ。

男1 ああ。

男2 じゃ、聞いてもらおうか、俺たち「仲良し四人組」の話から。あつ、せっかくだから、精神分析してもらおうかな、俺たちのこの過去を。

男1 精神、分析。

男2 そして心を救って欲しいんだよね、せめて、心だけでも。

(男2、ちよつと準備を。)

男1 えーと、何やってるんですか？

男2 転換。

男1 てんかん？

男2 ほら、本当はこつから俺の、ページにして3ページに渡る長台詞なんだけど、ちよつと分かりやすいように寸劇でお見せする計画で。

男1 はあ。

男2 ほら、手伝って。

男1 まあ、はい。あつ、この椅子を？

男2 それはそこで。

(などと、言葉を交えてセットチェンジし。)

○ダンス

(舞台、女1と男3も登場し、全員が等間隔に並ぶ。*男1が女2を演じることが可能。その場合には、前の場面の流れの中で、舞台上でサツと着替える。また、その場合には、女1もこの後に出てくる男4が演じることになる。

ダンス。

男1は(役を兼ねない場合には)退場、もしくは、この先の場面を観覧する場所へ。
舞台、男2、男3、女1、女2の、仲良し4人組の場面へ・・・)

○場面2

男2 俺たちは、典型的な男子2人、女子2人の仲良し4人組だった。各学校、各学年に2組から3組、多い場合には5組はいる、ありふれた、仲の良い4人組。いつつ、何処に行くのも一緒で、水泳教室や塾のクラスまで一緒だった。中学高校、高三のクラス替えて全員がバラバラのクラスになったけど、おんなじ大学目指したりして、趣味が一緒でおんなじサークルへ。なんだろう、俺たちの絆は固く、仲の良さは変わらなかった。しかし、実は、まあ俺たちには一個、大きな問題があったって話だ。

女1 あのさ、ずっと気になってたんだけどさ、私たちが出掛けるたびに、いつも雨が降るよね？

女2 あっあつ、それは私もそう思っていた。

男2 そう言われてみればそうかも。

男3 かも？ いやいや、雨ばっかだったでしょ、海の日も、花火の日も。

男2 ああ。

女1 遠足も社会科見学も雨だったじゃない。中学の修学旅行は4日中3日が雨だったし。

女2 確かあの時は台風が来たのよ。

男3 運動会は雨で中止、あー僕、リレーのアンカーだったのに。それに文化祭も夜のキャンプファイヤーが出来なかったし。

男2 そう言われてみればそっか。

男3 いやいや、ぶっちゃけ絶対この中に、雨男か、雨女がいると思うんだよね。

女1 この中に？

女2 どうしてこの中？

男2 学校には他にいっぱい人がいるじゃん。

男3 うんにゃ、学校行事だけじゃないでしょ、一緒に新海誠観に行った時も、細田守観に行った時も、ほら、野球観戦だってさ、途中でコールドゲームになっちゃったし。

女1 ああ、そう言えばそうかも。

女2 雨男か雨女かあ。

女1 あなたがそうなんじゃないの？

女2 えっ、なんで私、だって家族旅行とかで雨降ったことないよ、たぶん、いつも晴れてる。

男2 俺も別に、普段は雨降ったりしないよ、皆でどっか行こうって時だけかな。

男3 あのさ、この際誰が雨男か、雨女か、ちよっと調べてみない？

女1 調べるって、どうやって？

女2 調べる方法なんて。

男2 んー、思いつかないけど。

男3 ふ、ふ、ふ。

女1 おっ、不敵な笑い。

女2 何かあるの？

男3 1回誰か1人を外して、残りの3人で出かけるっていうのどう？

女1 3人？

女2 誰か外すって一体。

男3 だから、最初は聖子ちゃんを外して、残りの3人で映画とか行くでしょ、次に、今度は真理子を外して、

残りの3人でどっか行って、次は僕か丈一郎のどっちか外して、って全部で4回やれば、チーン、おのずと答えが出るでしょ。

女1 へー、頭いいわね。つまり晴れた回に外れた人が犯人ってわけね。

女2 わつ、面白い企画。

男2 えつ、自分が外された時にワンピースとか行かれたら嫌なんですけど。

男3 ワンピースは4人の時だよ、それは約束、とにかく毎週3人パターンで1か月かけて一周するってどう？

女1 よし決まり、さっきの話だと最初は私が外されるでいい？

女2 まあ、順番はさつき楠（くすのき）君が言った順番でいいけど。

男3 んじゃ、決まりだな。丈一郎も乗るだろ？

男2 まあぶっちゃけ、ちよつと怖いけど。

女1 怖いって言うか、スリルあるかも。

女2 えっ、もしも雨女認定ってなったら、けっこう来そうだけど。

男3 まあ、僕だって怖くないといえは嘘だけど。

女1 じゃ、次の日曜からどうぞ、私抜きで。

女2 聖子ちゃんその時何してるの？

男2 そりやゲームに決まってるだろ。

男3 ははは、そりやそうだな。

女1 えー、んーまあ否定はしないけど。

全員 はははは。

男2 ってなわけで、最初の週は聖子ちゃんを外して、なんか、ホラーに行きました。聖子ちゃんがいたら却下

されるやつね。超ビビりだからな、彼女。で、えー、雨でした。あのう、この話のオチは、賢明なお客様に

あつてはもう読んでいるだろうけど、すみません、どうぞ最後までお付き合いをお願いします。2週目、今度は真理子を抜きにして、水族館に行きました。真理子魚系は苦手だもんね。見るのも食べるのも。んで。

やっぱり雨でした。さて、ここで残ったのは二人。俺と楠。俺とあいつとどっちが最初に外れるか、二人の間では、それが問題になった。

(その二人の場面)

男2 楠、火持っていない？

男3 タバコやめたし。

男2 えっ、マジ？

男3 マジ、何度聞くんだよ。5回目だぞ。

男2 じゃライターは？

男3 だから持ってるわけないだろ。

男2 火打石。

男3 持っていない！

男2 マジ？

男3 嘘ついてどうするよ。6回目に数えるぞ。

男2 ー、じゃ買ってくる。

男3 ちよい待ち、あのさ、順番だけどさ、どっちが来週抜ける？

男2 ん？ まあ、もうこうなったら、どっちでもいいけど。

男3 実は次の1回で、もう結果って出ちゃうって思うんだけど。

男2 えっと、ああそっか、もしどっちかが抜けて、それで晴れたら、残された方が雨男決定って。

男3 逆もそうだけどね、雨が降ったら、きっと一緒に行っただけそれが雨男だよな。4週目にはきっと晴れる可能性大。

「雨の世界」

- 男2 えっ、じゃ、次が、運命の・・・、いや、そんなこと、4人目やってみないと、だってこの4人、全員が雨男でも雨女でもないってオチだって、その可能性だってあるわけでしょ。雨はただの偶然、きつと学校に、そうだよ、俺たち以外に雨男だか雨女だかが居たって可能性もあるにはある。
- 男3 そっか。じゃ次の順番におびえる必要はないってわけか。はあー、ちよつとホツとした。内心ビビりまくっていたから。
- 男2 えっー、楠が提案者だろ。
- 男3 聖子ちゃんか真理子のどっちかかって思ってたんだよね、実は勝手に。
- 男2 マジ？
- 男3 根拠はないんだけど、勘。
- 男2 お前の勘じゃあな。
- 男3 じゃ、どうする？
- 男2 じゃあ、じゃんけんでもやるか。
- 男3 おっ。僕が強い知ってて勝負するか？
- 男2 じゃんけんが強いか弱いかあるかよ？
- 男3 あるだろ。
- 男2 確率的にはイーブン。
- 男3 いやいや。
- 男2 勝った方がやっぱ次抜ける？ それとも逆？
- 男3 んー、逆にしよ、勝った方が、ラスト。
- 男2 オーケー。
- 男3 んじゃいくね。せーの。

男2 邪魔なんて別に、ただこの4人の関係が崩れるのが怖いって言うか、この4人組がいいんじゃないか、俺たち4人って言うのが、だろ？ だいたいそれ言ってたの楠の方じゃないか。

男3 あー、ごめん、それはそうなんだけど、ほら、そんな簡単じゃないって言うか。ごめんごめん、忘れて、つい口に出ちゃって。

男2 ずっと皆仲良く行こうぜ、老人になってもさ。

男3 ははは、そうだね。

(場面チェンジ。)

男2 そして俺は、次の日曜の湾岸線のドライブの最中に、降り出した雨を見て、だんだん気分が悪くなってきた。車酔い？ いやいや。雨を見てショックを感じたことは否定できない。わー俺って意外と繊細。っていうか弱っ。真理子に運転代わってもらって、二人には早々に家まで送ってもらって、そのあと俺、3日間も寝込んだんだった。

ずっとベッドから出られなかった。でもその間、だんだん気持ちが悪くなってきて。そうだよ、自分で言っていたじゃないか、まだ4週目が終わるまでは分からないって。次の日曜に雨だったら、誰が雨男ってことじゃなく勝負はドロー。俺達の中に雨男も雨女もない、そういうことになる。幸い、って言っているのか、週間天気では、次の日曜も雨って予報が。4週休日の雨が続いて残念って「木原さんとそらジロー」が言っていたっけ。よっしゃー。

俺は元気を取り戻して、木曜からは講義にも出れるようになった。俺が参加しない3人の次の行先は、新しく出来た猫カフェに決まったらしい。えっ、ズルい、俺の猫好きを知ってて、くそー。そう言っても、3人ともワハハって笑うだけだ。

そして日曜日、アマプラで無料で観られる映画を観始めたが、集中なんて出来なかった。天気予報は外れた。その日は一日中快晴。見上げれば空には雲一つない青空で、テレビの画面は久々に晴れた休日に街に繰り出す人々を映し出していた。

雨男は、俺だった。そしてその時から、すべてが変わってしまったんだった。

(男2と男3)

男2 おい、どういうことだよ？

男3 ……なにが？

男2 だから、一体どういうことだって？

男3 何の話？

男2 とぼけんなよ、日曜、真理子と別れてから何があった？

男3 ー、なんだろ、なんか、色々あつて。

男2 いろいろ？

男3 なんか、まだ時間あつたし、急に遠くに行きたいって聖子ちゃんが。

男2 遠く？ 遠くってどこ？

男3 さあ。なんか遠くよ。どこまでも行こう、みたいな。

男2 青春か。

男3 いや一応青春でしょ。

男2 告白したのか。

男3 いや、告白って言うか、してないしてない、言葉では何も、ただ、なんか、いい雰囲気ってやつになってしまつて、ずるずると。

「雨の世界」

- 男2 ずるずるとって何だよ。
- 男3 あるだろうが、そういうことって、いやーまいった、流れに逆らうことが出来なかった。
- 男2 やったのか？
- 男3 やったって露骨な。
- 男2 そうなんだろ？
- 男3 やめよう、そういう方向の話は。ね。
- 男2 ああもう、言ってたことと違うじゃないか。4人の関係が壊れるってさんざん。
- 男3 それは丈一郎が。
- 男2 そもそもは楠が。
- 男3 ーでもさ、丈一郎は只の幼馴染なんだろ？
- 男2 だからって何も気持ちがないわけじゃ。
- 男3 わっ、タイミング。今更急にそんなこと。
- 男2 いや、だから4人でずっといられるように我慢して。
- 男3 我慢が足りなくてすみませんでした。
- 男2 いやいや、開き直られても。
- 男3 真理子と付き合えば？
- 男2 えっー、ありえない。
- 男3 ちよい、真理子が可哀相だろ。
- 男2 いやいや、真理子だって聖子ちゃんが好きだったんだよ。
- 男3 えっ、何それ。
- 男2 気づけよバーカ。俺たち陰で、聖子ちゃんを中心に四角関係だったんだよ。
- 男3 うわっ、怖っ、えっ？ ぜんぜん仲良し4人組なんかじゃないじゃない。

男2 いや、だから、そういう繊細なアレだから、気をつけて大切に守って行かないと。

男3 いやいや。そんなことやって維持しても何の意味もないって。

男2 お前がやったことがヒビを入れたんだぞ。

男3 いや、ぶっちゃけ、彼女のが積極的で。

男2 彼女のせいにするのかよ。

男3 いや、そうじゃないけど、事実・・・いや、ごめん、僕も悪かったよ、僕もぜんぜんそういう気だったし、ホテルに手引っ張って入ったのは僕の方だし。

男2 ホテル！

男3 そりゃ、そうだろうが、そういうことするのに。

男2 ああもう、只でさえ雨男認定されて、落ち込んでるのに、なんだよ、安心して落ち込んでもらえない。

男3 ああ、丈一郎が雨男だったとはな。

男2 今まですみませんでした。

男3 いや謝ることないけど、でも、ね、いや本人が一番ショックだよな、すまん。

男2 さぞ晴れ渡ったデートは楽しかったでしょうよ、猫カフェじゃ物足りなくなるのも無理ないって。せっかくだしね、遠くまで足だつて延ばしたくなるって。ああ雨の降らない青春ヤバツ！俺雨男だからせんぜん想像力追いつかない！

男3 そんな、ヤサグレんなよ。

男2 俺はさ、もう心ぐらぐらで、日曜は晴れた空見て一日中泣いてたんだぞ。それなのに親友が追い打ちをかけて、ああもう、そりゃヤサグレますよ、ええ、ええ、心がもうぐちゃぐちゃ。

男3 いや、悪いと思ってないわけじゃないんだよ、いや本当、そりや思ってる。丈一郎の気持ちも、まあお前は認めなかったけど、そりや分かってはいたし。でも、そうなっちゃったんだよ、そうなっちゃったの、言い訳にならないけど、現実には、目の前に聖子ちゃんみたいなのがいて、分かるだろ、二人つきりだぜ、そりやさ、どうしてもそういう。

男2 ごめん、今は無理だわ。(去る)

男3 おい。(追う)

(電話の音が聞こえる。それに遅れて、男2が出てきて、スマホに耳を当てる。別の場所で電話に出る女1。)

女1 もしもし。

男2 おう。

女1 どうしたの？ 電話なんて珍しい。

男2 ああ、あのさ、単刀直入に言うと、好きなんだけど。

女1 えっ？

男2 お前だって本当は気づいてると思うけど、一応好きだったんですけど。

女1 確かに、単刀直入ね。えっと、あのさ、よくある返事で悪いけど、お兄ちゃんみたいにしかったことな
くって。

男2 えー、なんだよそれ、自分の言葉で言えよ、決まり文句。

女1 えっ、だって自分の言葉で言ったらなんか傷つけることになると思ってる。

男2 グサツ、何だよそれ、かえって傷つくだろうがよ、そんな言い方。

女1 あっ、ごめん。

男2 えー、まじー？ 本当に？ こんなんで俺の初恋終わるわけ？
女1 初恋だったの？
男2 そりゃ幼馴染だぜ。
女1 そっか。
男2 なんで楠とくつつくかな、今更。
女1 ねえ、丈一郎君、一応言うど、こういう電話はダメなんじゃないかな、だって楠君と私のこと、もう知ってるってことでしょ？ 楠君とは友達なんじゃないの？
男2 えっ、そんなこと言ったら、だって先に向こうが。
女1 ごめんない。全部私が悪いの、あの日、私が気持ち全開で、引っ張ってって、そういう関係になっちゃったの。私の責任なの。
男2 かばうなよ。
女1 かばってるんじゃない。
男2 なんで俺じゃダメなのかなあ？
女1 えっ？
男2 一応聞くけど、なんで、俺ではダメだったのかな、ずっと一緒にいて。
女1 だって、..
男2 ..だって？
女1 ごめん、あのさ、雨男なんだよね？ 今までずっと私たち雨ばかりでさ、ごめんね、雨男とはもう無理なの、分かるでしょ？
男2(しばらくして、電話切る)

(電話が切れるのと同時に女1も消える。男2、しばらくの沈黙。もしかしたら、歩き回るかもしれない。そして、戻ってきて、おもむろに電話を耳に当てて、どこにもつながってない電話に。)

男2 あー、今の間違い。ごめんごめん、間違ったー。そりやそうだよな、うんうん分かる、デートのたびに雨なんて最悪だもんな、そりや失礼しました。今思ったけど、雨男と付き合おうとする奴なんてそりやいいわ。そりやそう。はいはい分かりました。すみませんでした。

だいたいさ、他にもいっぱいあるでしょ、俺は性格だって悪いし、口も悪いし、すぐ感情的になる、感情的になつたら手が付けられない、乱暴だし、本当はもつと優しくしなきゃいけない場面だって、今まで色々、だからさ、分かっちゃいるんですよそりや、最初から、うまく行きつこなんてないって、ぜんぜん無理だって、そりや俺にだって。あー情けない。

でもさ、でも、情けないけど、友達裏切つてでも、告白しとかないとき、無理でも、伝えないと、気持ち、そういう、あれだよ、こういうの、分かるだろ？ それが、なんだよ？ 雨男？ 雨男！ なんだよそれ。それが理由？ お前の、聖子ちゃんの気持ち^ちが知りたいのに雨男って、何だよそれー、はっきり言つて馬鹿にするのもいい加減に・・・

(男1が出てきて。)

男1 あの、丈一郎さん。

(雷！ 続く強い雨。)

時は急激に戻り、場所は男2の家。男2、深く息を吸ってから。)

男2 ……ってなわけで、なっさけない話しちゃったけどさ、その日、聖子ちゃんから電話で、「雨男とは無理だ」って言われたその日が、俺が雨男になった日なのでした。

男1 えっ？ 晴れちゃった4週目の日曜日じゃなくって？

男2 いや、あいつの声が、彼女の声が、「雨男なんだよね」って言った、その、「雨男なんだよね、雨男とは無理だよ」って言った、その言葉が、あー、俺を本当に雨男にしてしまったって思ってるんだ。あの最後の時の電話の日の日が。

男1 最後？

男2 いやー、仲良し4人組はその時で自然解散、なんか、会うこともなくなっちゃって。もろいね、友情。まいったー。そりゃ、楠とは男同士って言うか、取ってる授業とか一緒に顔合わしちゃうけど、まあね、話しづらくって、だってこうなったら悪いのは俺だろ、あの電話、要するに友情無視だもんな、なんかこっちが避けるようになってさ。あー、ごめんごめん、実はここまでの話するつもりなかったのに、勢いついてオブラート包めなかった。

男1 そう、なんですか…

○場面3

(気が付けば雨音。そして雷鳴。)

男1 そう言えば僕、子供の頃から嵐ってかなり好きなんですよね。

男2 一応聞くけど、解散しちゃったのに？

男1 一応答えますと、そっちじゃなく。

男2 はい。(笑)

男1 今じゃけっこう被害とかあつてさ、嵐が好きとか言いづらいですけど、でも僕は好きでしたね。子供の頃、窓の外見てね、黒い雲がどんどん広がって、風とか強くなつて、それ見てすごい興奮してさ。そしてとうとう、激しい雨が黒い空から落っこちてくる。もうね、僕はヤッターって声あげて、玄関開けて家の外に飛び出す。雨の中で大笑い。はははって。いやーあの時はお母さんに無茶苦茶怒られたな、拳骨が飛んできた、ガツーンって、家の中を逃げまどいましたよ、びしょびしょのまま。

男2 なんか、分からないこともないな。確かに台風の興奮であつたような気がする、昔はね。

男1 僕は今でもそうです。

男2 四郎君さ、それって俺を慰める的な話題？

男1 いえ、たまたま今そんなこと思い出して。

男2 そう。んー、じゃ、気持ちを切り替えて、話の続きでもしよっかな。

男1 えっ、この話続きがあるんですか？

男2 続きって言うか、雨の世界第2章。もう奴らとの話はほぼ終わりね、でも実は雨男の正体についてはここからが本題だったりして。

男1 正体・・・

男2 そ。そんなことがあつて、それで俺、弟呼び出して奴と話したんだよね。俺、弟がいてさ、俺と違って賢いやつ。あの頃俺は、もう学校は卒業してて、東京出てきて、弟は学校こっちにしたからやっぱ東京に。んで、そんな頃、ある時弟呼び出して聞いてみたんだよね。つまり、お前も雨男なんてことはないよな？つて。だって、考えてみたら、これって家系の問題なのかな、つて。

男1 どうだったんですか？

男2 うん。では、第2章開幕つと。

(男2、自ら転換に動く。)

これ以降の場面、可能なら、話を聞いているだけの男1も、ずっと舞台上の別空間で、男2が話すストーリーを体験するかのようになっている。)

○場面4

(新たな次の回想。場所はファミレス。)

男4 (カップを2つ持ってきて) 本当に水でいいのか?

男2 ああ、そんな甘いのはハッキリ言って毒だからな。

男4 大げさだなあ。

男2 年齢考えろ、俺はそんな毒はやめたんだ。

男4 そこまで歳食っちゃいけないだろ、もう、飲みにくいなあ。(飲むけど)

男2 だからドリンクバー一人分でいいって言ったんだよ。

男4 お兄ちゃんの分何も頼まないわけにはいかないだろ。

男2 平気だろ、そんなの。

男4 平気じゃないって。(飲んで) うまっ。

男2 ……、よう、結婚おめでとう。

「雨の世界」

- 男4 へへへ、うん、ありがとう。
- 男2 なんだよ、急に籍入れたって、もっと早く言えよ。
- 男4 うん。ちよつとね、色々あって。
- 男2 できちやつた婚じゃないんだろ？
- 男4 うん、でも彼女が早く子供欲しいって。
- 男2 おつ、いやいや、お前がまだ学生だって分かってるのか？
- 男4 まあ向こうは働いてるしね、歳も少し上だし。
- 男2 つて言ってもさ、兄を差し置いて早すぎだろ。
- 男4 ー、だよね、すまん。実は彼女の父親がちよつと病気でさ、なんか、孫の顔を早く見せたいって、そんな話もあって。
- 男2 へー。俺まだ会ってもいないよな、お前の奥さんになった人。
- 男4 うん。いや、本当、すぐ会わすから、今彼女仕事も大変で、今日も時間なくって。それこそ結婚式とかも、落ち着いたらって感じで。
- 男2 ー、美人なんだろうな？
- 男4 ー、まあお兄ちゃんに興味が一緒だからね、きつと羨ましがると思うよ。
- 男2 おつ、ねえねえ誰に似てる？
- 男4 誰？ ー、ジョゼフィーヌ・ド・ボアルネとか。
- 男2 誰だよ。
- 男4 ナポレオンの最初の奥さん。
- 男2 (笑) 知らんがな、芸能人とかで言えよ。
- 男4 ー、芸能人・・・、ジョウ・シユンとか。
- 男2 だから誰？

男4 ほら、岩井俊二が中国で撮った映画に出てた女優さんで。
男2 いや知らないって。
男4 タマンナー・バティアとか。
男2 今度は何人？
男4 バーフバリに出てた天女みたいな。
男2 インド人か。もっと分かりやすい芸能人とか思いつかないの？
男4 ー、んー、ちよつとエキゾチックなんだよね。あつ写真見る？
男2 そうだよ、写真！ どうして最初に見せない？
男4 えつと、(スマホをいじつて) ほら、これ。
男2 おつ、エキゾチック！ やべ、本当美人じゃん。
男4 でしょ。へへへ。お兄ちゃんは最近はどう？ 彼女は？ ってか元気にしたの？
男2 ん？ まあ普通、かな。彼女なんて、バイトとか忙しくつてな。
男4 まあ僕も勉強超大変で、結婚までしちやつたからぜんぜん余裕なかったけど。
男2 兄はバイト、弟は勉強、この差は何だろうな？
男4 社会学つてさ、地方行つて調査したりとか、けっこうやること多くつてさ。
男2 ーん、それに加え教職も取らないとだしな。
男4 まあね、人より遅れてスタートして、何浪もしてやつと入つたんだし頑張らないとね。
男2 偉いよな、尊敬するよ、弟ながら。
男4 それより、今日は何だっけ、何の話だっけ？
男2 あー、だから電話でも言っただろ、雨男、もしかしてお前もそうかなつて、そう思つて。
男4 ああ、んー、すごく言いづらいけど。
男2 あつそつつか、じゃやっぱ家系とか関係ないか。

男4 いやいや、僕も雨男だよ。

男2 (一回立ち上がって、座る) やっぱ、やっぱそうなのか!

男4 僕はけっこう子供の頃から気づいていて、お兄ちゃんボケてて全然気づいてないみたいだから、ずっと話題にしづらくって。

男2 そうなのか? ごめんボケてて。

男4 あのさ、うちって田舎、山梨の田園地帯じゃない。

男2 ああ、子供の頃に行っただきりであんまり覚えてないけど。

男4 僕はお祖母ちゃんが好きで、一人でもけっこう行ってたけど。

男2 そうだっけ。

男4 なんかさ、農家でもないのに、むっちゃ大きな家だったでしょ、田舎の家。

男2 うん、そうだった。えっ、うち農家じゃないの?

男4 違うよ。あれね、雨が降らない日に雨を降らす雨乞いの家だったからなんだよね。

男2 雨乞いの家?

男4 あんまり知られてないけど、田舎には時々そういう家があってね、周囲の農家から頼まれて、日照りの時とか雨を降らしたりするんだよ。逆にずっと晴れ間がない時に雲を追い払って晴れにする家もあるみたい。うちの田舎で言うと、イカ二貫さん家(ち)がそうみたい。ほら、やっぱ農家でもないのに豪邸が建ってる。

男2 イカ二貫さんって苗字?

男4 うん。で、そういう家は聖（ひじり）って呼ばれて、その地域で偉くなって行くわけ。聖って、本当は神聖って字じゃなくて「日を知る」って書くんだよね。日を知る、そりゃ農耕民族ニッポン人にとってはずごく重要になるわけ。んで、我が家は、代々そういう家だったりする。

男2 ってことは、俺の雨男ってそれって、血？ 遺伝的に先祖から代々続いているってこと？

男4 そういうこと。でも農業が減っている現代では、もう忘れ去られた、ある意味 unnecessary の家系になってしまった。

男2 海老フライの家に、そんな秘密が隠されているなんて。

男4 僕に言わせれば今や呪いだね。

男2 呪い。

男4 「ハレ」と「ケ」って言葉知ってるでしょ。

男2 ああ、「ハレ」はお祭りで、「ケ」は日常、みたいな。

男4 雨男はね、雨女もそうだけど、ハレの日に雨を降らしてしまう力を授かっている。日常、つまりケの時には雨男の能力は発揮されない。自分の力で雨を降らすなんてことは起きない。でも何か、例えばお祭りとか、遠足とか運動会とか、個人的に友達と旅行に行こう！ なんていうのも含め、特別な日には雨を降らしてしまう。昔ハレの日にやっていた雨乞いの儀式が、そういうイベントの時に変にリンクしてしまうらしいんだよね。

男2 えっ、それって。

男4 そういうこと。

二人同時 最悪。

男2 えー、お前弟のくせに、なんでそんな詳しいわけ？

- 男4 お兄ちゃんぜんぜん田舎に行かないからね。
- 男2 行ったらそういう情報入ってくるの？
- 男4 僕色々聞いて回ったし。
- 男2 でもさ、ぶつちやけあの家、ちよつと怖かったじゃない、なんかお化け屋敷みたいで。
- 男4 お祖母ちゃん死ぬ前からお化けみたいだったしね。
- 男2 そうそれ！ 怖かったー。
- 男4 それでも僕はね、なんとか雨男の秘密を探ろうと、どうにかそこから抜け出せないか研究しに、田舎に行つてたんだよね。
- 男2 子供の頃から？
- 男4 だって子供の頃からの僕の夢知ってるでしょ？
- 男2 ん？ 学校の先生？
- 男4 そう。金八新八仙八、熱中時代に教師びんびん物語。
- 男2 情報が古いな、全部再放送だろ。
- 男4 最悪のあの学校から家に帰ると、ちよつど夕方、金八先生の再放送とかやってて。
- 男2 まああんな教師いないけどね。
- 男4 だから目標になるんじゃないか、ああいう破天荒な先生になって、荒れた学校を僕の手で救うんだGTO
って。
- 男2 分ないけど、はい。
- 男4 まあさ、僕どうやら純粋に子供が好きみたいなんだよね。なんか子供と一緒に遊んだりとか、すごいテンション上がるし。
- 男2 俺とは真逆だな。

男4 でもさ、そこで考えてみて、雨男が教師ってなれると思う？ 運動会とかいっつも雨とか、子供たちが可哀相でしょ。

男2 ああ、そうだな。

男4 で雨男の研究につながると。これは僕が夢を叶える第1歩ってわけ。

男2 おっ、そっか、ようやく事情が呑み込めた。

男4 そもそも雨ってどうやって降るんだと思う？

男2 どうやって？ そりゃ、雲がやってきて、雨を。

男4 その雲はどうやって出来るのか。

男2 知るかよ、考えたこともないよ。

(例えば、始業のチャイム。例えば、黒板の文字や絵を見ながら。)

男4 さてさて、まず海や地面から蒸発した水分が上昇気流に乗って上空の、温度の低いところまでたどり着く。そうすると、水分が冷やされて「雲つぶ」と飛ばれる水のつぶになって、雲を形成する。雲って水蒸気って勘違いされるけど、実際はもっと大きな水のつぶで、上昇気流がそれを持ち上げていってわけ。そして上昇気流によってさらに「雲つぶ」が上に向かうと、「雲つぶ」同士がくっつき合ってどんどん大きく、重くなっていく。そしてとうとうその重みに耐えられなくなり、地上に落下する。

男2 はい、先生！

男4 雨男はね、ハレの日にはテンションが上がるでしょ。

男2 テンション？

男4 運動会だろうが旅行だろうが、とにかく気持ちが高ぶる。どうしても興奮状態になる。それが、その地域に上昇気流を発生させるってわけ。

男2 うわっ、雨男の仕組みまで解明したのか？

男4 まだ予測の段階、でも、きっとそれしか考えられない。僕たちにはきっと、上昇気流を発生させる能力がある。（*ポーズ）

男2 エスパァー！

男4 ビビビッ！ って、コントロールできなきゃ意味ないけどね。

男2 ああ、そっか、だから呪いか。

（終業のチャイム。）

男4 それでさ、僕は今、定期的にお寺にも行って、座禅組んだりしているんだよね。

男2 座禅。

男4 それに、ヨーガも、本格的なの習ってる。健康のため、とかじゃなく、常に平常心で、心を落ち着かせる訓練のつもりで。

男2 それで、効果は？

男4 っー、ちよつとはあるかも、つてくらい。やっぱイベント的なことに一切参加しないのが一番いいみたいだね。でもさ、そうやって常にテンション低めで、平常心でずっと暮らしていくでしょ？ そうすると、どんだん蓄積するみたいなんだよね。

男2 蓄積？

男4 つまり、長い期間、小出しに雨を降らしたりしてないと、いざ雨男の能力が発揮された時に、すごい災害級の雨が降るみたい。嵐とか、すごいゲリラ豪雨とか、この地域の上空に、線状降水帯とかが発生したり。

男2 えっ、つてことは、八方塞がりつてこと？

男4 まいるよ、下手に長く平常心保ち続けると、後で大きなしっぺ返しがやってくるって。僕、実はちよっと心当たりあるんだよね。これまでに起こった災害級の雨で、自分のせいって自覚あるのがある。ほら去年も、すごい大きな台風あったじゃない？

男2 お前がやったとか？

男4 いやー、まあ自覚がないから、たぶんとしか言えないけど。

男2 えっ、だってそれじゃ、学校の先生になるって夢は？

男4 ー、ね、ずっと悩んでる。でもまだ諦めるつもりはないんだよね。なんか方法ないかなって、ずっと研究は続けてるつもり。なんかあると思うんだよね、何か方法が。今もまだ、僕は自分の雨男と戦って行ってるよ。

男2 わー、強いな弟のくせに、兄と全然似てない。すぐ折れちゃう俺とは正反対だな。

男4 そんなこと。僕から見たらお兄ちゃんのがぜんぜん強いよ、なんか、しなやかかっていうか、強い風の中でも折れずに、のけ反って流していける。でも僕はそんなに柔軟じゃないんだよね、折れないように頑張っていかないと、いざって時にはポキっていつちやいそうで。

男2 そうかな。俺今、こんな話聞いたらこれまでの十倍は落ち込みそうだけど。

男4 ははは。最初はね、僕も最初かなりショックだったし。

男2 笑い事じゃない。

男4 あのさ、実はこの話さ、お兄ちゃんの友達にも話したことあるんだよ。

男2 んっ？ 何の話？

男4 前に、いや結構前だけど、お兄ちゃんの友達が訪ねてきて、楠さんだっけ。

男2 楠がなんで？

- 男4 さあ、なんかお兄ちゃんのこと心配してて、結婚して家離れる前につて、僕に話聞きに来たつて。
- 男2 えっえっ、情報量、ん？ 楠が心配、つて言うか結婚！
- 男4 結婚するとかしたとか言つてたよ。
- 男2 うっそーん。
- 男4 知らなかったの？
- 男2 えっ、本当に？ そ、そうなのか。
- 男4 なんかね、ずっとお兄ちゃんと話せなくつて、なんか心配してた、雨男のこととか知つてたし。
- 男2 いやいや、それこそ。俺のことなんか、もうどうでもいいはず。
- 男4 まあ詳しく聞いてないから分からないけど。
- 男2 結婚、つて、やっぱあいつとだよな、そりゃ。
- 男4 まさか聖子ちゃんさん？
- 男2 うーん、たぶんね。
- 男4 お兄ちゃんいつの間にフラれてたんだ。
- 男2 違う違う、別にただの幼馴染だったし。
- 男4 ははは、まあいいけど。あのさ、僕と一緒に座禅組む、いい寺紹介するよ。
- 男2 寺？ つてか座禅？ いや俺が座禅？ 無理無理、ヨガなら、まあいいけど。
- 男4 おっ、じゃヨガ一緒にやろ、夫婦でずっと一緒にやってるから、ちようど彼女にも会わせられるし。
- 男2 ヨガで？
- 男4 そう、インド人が教える本格的なヤツだから。
- 男2 えっ、その本格的つていうのは、なんか体ヤバそうなんだけど。
- 男4 極めるとね、空中に浮かべるようになるみたい。
- 男2 えっ、俺これ以上能力者になりたくないんだけど。

男4 えっ、僕は浮かびたいなあ。
男2 マジ？ まあ浮かぶのは別にしても、体に良さそうなら考えてみるけど。
男4 体にも心にも。よし、じゃ今度行く時誘うよ。一緒に行こう。
男2 うん、分かった。

(雷で一瞬暗くなる。雨音が戻る。同時に時が戻る。男4が消え。)

○場面5

男1 なんか、今の話の授業感すごいですね。
男2 授業感。
男1 雨男とか、雨の仕組みとか、今まで耳にしたことない知識で。
男2 そうだな、あん時は弟には勉強させられたわ。
男1 仲のいい兄弟なんですね。
男2 まあね、歳もちよつと離れてるし、それに今や雨男の運命共同体でもあるしね。
男1 じゃ、余計に絆深まりそうですね。
男2 ああ。
男1 あのう、聞きにくいけど、聞きますけど、やっぱり聖子ちゃんと楠さんはご結婚を？
男2 うん、あん時は、これから結婚って話だったみたいだな。小学校の時のクラスメイトに電話して聞かなかつたら、ずっと知らないままだったわ。

(しばしの沈黙が訪れる。雨風の音。)

男1 ……あれ？

男2 ……

男1 あの、今、パーティーって…

男2 おつ、何かに気付いたみたいだな。

男1 まさか、今日がお二人の結婚式なんてことはないですよ？ まさか、それで、今日までヨガでずっと蓄

積してきた雨男の力を、今まさにパーティー開いて、発揮させて、それでこれほどの…！

男2 おつ、推理だねえ、じゃどう思う？ 俺、そんなことしそうかな？

男1 ー、いや、すみません、想像で勝手にそんなこと言っつて。

男2 今まで平常心で生活してきて、俺の中の雨男を蓄積させてきたのは当たり前だな。ヨガは俺には合わなかつ

たからすぐやめたけど、その後ニートになってこの実家に閉じこもって、テンションの上がない生活をしてきたのは事実だし。もう貯金も残ってないし、そろそろ、さすがに働かないとヤバいんだけどね。

男1 じゃ、まさか本当に？

男2 正直心配だよ、今この雨の災害すごいのかなって。なんか責任感しないこともないんだよ、誰か怪我したりとか、まさか誰か死んだりしたら困るなって。

男1 いや、だから、下の川と道路、区別がつかなくなっつて本当ヤバいんですよ。

男2 そんな日に、四郎君さ、なんで車なんかで出かけたわけ？

男1 ……えっ？

男2 自分でペーパードライバーって言ってたあんたが、どうして車なんかで？ 窓から見える坂の上の車、乗ってきた車でしょ、あれ。ほら見て、双眼鏡で、よく見えるだろ。なんかさ、自分のって感じじゃないんだよな、ぶっちゃけ。あんなスポーツカー乗るようなタイプかね、ペーパードライバーが。

男1 す、すみません。

男2 謝らなくともいいよ、変だなんて思ったただけだから。

男1 すみません。

男2 やっぱ盗んできたのかな？

男1 盗んだなんて、そんな、勝手にちよつと借りてきた、みたいな。

男2 それを盗んだって言うんだけど。

男1 家の車ですし。

男2 兄弟か親父さんか。

男1 義理の、父親です。母ちゃんの新しい男で、本当の父ちゃんが死んで随分経つから、まあ新しい男と結婚したって、そりや文句なんてありませんけど。

男2 ちよつと思っただけけど、膝の怪我は本当にそこで転んだもの？

男1 えっ？ それは本当に、そこで滑って転んで。

男2 腕といい、足といい、あざが多いからどうなのかなって。

男1 ……あざ、目立ちます？

男2 まあ、こうやって長く話してるとね、気になってくるって言うか。

男1 そっか、そうですよね。

男2 虐待？ っと思っていいんだよな。よくあるやつか、親の再婚で、ろくでもないヤツが家に転がり込んで、みたいな。母親の相手だしな、何されても文句も言えず、虐待がエスカレートみたいな。ごめんな、勝手に他人の家の事情に上がり込んで。

男1 いえ、あの、ははは、やだなー、丈一郎さんシャーロックホームズみたいですね、そんな推理。

男2 当たっちゃったってことかな？

男1 ……まあ、おおむね。いや最悪な男でさ、ぜんぜん働かないで家にいるからさ、一度文句を言ったらすげー殴られて、ボッコボコ、後はもう毎日のようにってパターン。まあ僕が弱つちーのがいけないんですけど、あいつ、働かないでしょ、で僕の給料そのまま勝手に持っていきやがって、くそ、最悪。でも人間って不思議でさ、なんか今までずっとそんな生活続けてて、我慢して、我慢して、なんだろ、あつ、母ちゃんに暴力とか、そっち行ったら嫌だなとか、色々考えちゃって、それで。

ほらさつき、精神分析の勉強してると言っただでしょ。フロイトはさ、無意識って言葉を發明して、人間には意志なんてないって教えてくれたんだよね。何もかも、自分の意志で決めたって思いこんでいる何もかもが、本当は何か別のものに決められて生きてる。本当はぜんぜん意志なんて持ってないって、無意識って言葉で説明してくれた。僕はその時、そんな真っ只中を生きてるって思ってきたんです。でもさ、でも、そこから、どうやって抜け出せるか、僕はずっと考えてきたんですよ。だってあんな酷い家に、なんでずっと居続けるのか、あんなのと暮らしてると、絶対おかしいことなのに、なんで、なんでって。無意識って化け物に支配されて受け身で過ごしている状態から僕はずっと抜け出したかって、そう思ってきた。そして、どうとう、その機会がやってきた。

テレビのニュースが警報を発してる。「嵐」がやってくるって。豪雨の中を飛び出した子供の頃の記憶がまざまざと思い出された。窓を開けたら、黒い雲がどンドン。強い風が顔を叩いた。そしてどうとう雨が、凄いや雨と風が、街や家だけじゃない、今度は僕の中に入ってきて、心を叩いた。今だって。今が、よく分かる

ないけど、今が！ チャンスだって！ だから僕は嵐の中に飛び出したんです。なんだかヤツの車勝手にエンジンかけてね、全部を捨てて、車をスタートさせた。

（男2、思わず吹き出して、笑い出す。）

男2 ふつ、ははは・・・、へー、なんか、頑張ったな。

男1 ええ。そうですね、頑張った。

男2 またお母さんの拳骨が飛んできそうだな。

男1 いや、実はもう亡くなってるんです。半年前に。

男2 ああ、そっか。

男1 それに今回は、お母さんだって怒らないと思います。きっと背中を押してくれるって勝手に思ってる。

男2 うん、そうかもな。

男1 なんか、本当、ありがとうございます。川が氾濫してて死にそうって思ったけど、でもこの雨には感謝してるんです。きっと自分は、心のどこかでこういう日を待っていたんだって。家から逃げ出す、玄関を飛び出す、こんな激しい嵐の夜を。

男2 まあ、そんな風に俺の雨が役に立ったのなら。

男1 もしかしてすぐに見つかって連れ戻されちゃうかもしれませんけどね。

男2 なんか、あるんじゃないかな、無責任なこと言えないけど、見つからない方法とか、対策の仕方がさ、一度行動を起こしたのなら、もっともって行動すれば、この世の中は広いぜ、きっと何かあるはずだよ、意図って言うか、そういう、行動力ってヤツは人を裏切らないって思うんだよな。

男1 ありがとうございます。この雨だけでなく、励ましの言葉まで。

男2 まあ雨はただの偶然だけだね。

男1 あーでも、やっぱこんな日に結婚式は最悪ですね。

男2 ん？ ああ、まあこんな日に結婚式の運の悪いカップルだってそりやいるだろうけど、残念、って言うか、楠の式はもうとつくだよ。

男1 えっ？

男2 もうけっこう前の話、それはね。いやー確かに恨んだよ、結婚式に俺を呼ばないって、実は聖子ちゃんが電話してきてさ。彼女が、雨のウェディングなんてあり得ないって、まあ確かにあいつなら言いそうだけど。まあ俺だって悪かったんだよね、幼馴染ってことはさ、あいつさ、子供の頃からずっと雨ばっかだったんだよね、色んなイベント、だから俺って言うか、雨にすごい恨みがあるんだよ。まあさ、そりや分かるよ、結婚式くらい青空の下でやりたいって、そりやねって。

男1 それじゃ、あの、パーティーって。

男2 パーティーっていうのは・・・、ねえどう見てもパーティーらしさゼロでしょ、この部屋。

男1 そうですけど、だってこの雨。

男2 ……

男1 あっ、弟さん？ さっき話に出てきた、弟さんも雨男だって。

男2 あっそっか、気が付かなかったけど、もしかしたらあいつも力貸してるのかもな、それで、ここまで酷い嵐になってしまったのかも。

男1 えっ？ 何かあったんですか？（男2のシリアスな感じに気づき）・・・何が、あったんですか？

男2 ねえ四郎君、この絵どう思う？ 俺が子供の頃に描いた弟の絵なんだけど。あ、こっちは、もうちよつと大きくなってからの。こっちのがちよつとは上手いかな。どう、信じられないだろ、実は俺子供の頃から絵描くのがすごい好きでさ、目指してたの、画家とか。学校も美大だったの、まあうまく馴染めなくて挫折しちゃったけど。昔さ、あいつをモデルに何枚か描いててさ、今日急に思い出して、まだ残ってたから全部出して飾ったんだよ。遺影のつもりで。

男1 遺影・・・？

男2 あいつ、いつ会っても明るいしさ、そこまで追い詰められてるなんて気が付かなかったんだよね。今思えば、自分でも言ってたよね。なんかあったら、ポキって折れちゃうかもって。ああでも、本気にしてなかったんだよな、やっぱあいつは俺より強いって、ずっと思ってたからさ。

（場面が変わり。以下、男1は、場面6の出来事も目撃する。）

○場面6

（回想。男4が体験した一場面。話し相手は自分の奥さん。）

男4 えつ、どういう、検査の、結果？ 子供が出来ないのは僕のせいって？ 精子の異常が見つかって、量も足りない。いやそんなこと言われても、あの、もう一回他の病院で調べて・・・、いやいやそれで離婚って早すぎでしょ。ちよ、ちよつと、とにかく落ち着いて、ね、そんな焦らなくっても、そりゃ、子供は好きだよ、何度も話したじゃないか、僕も大好きだって、子供をたくさん作って、家族をつて、だから、ちよつ

と、なんで、おい、無理って何が、だから、もう一回ちゃんと調べてから、なんでいきなり離婚とか出てくるわけ、そりやお前の事情だつて分かつちゃ・・・おい！

（走って追いかけてしようとするが、立ち止まり。電話の音。男4、瞬間、時間と場所を移動し、スマホを手に。）

男4 ああ、もしもし、お兄ちゃん、なに何度も電話してくるんだよ、もう本当、大丈夫だつて、本当だよ本当
本当、何度も言わせんなつて、そりや落ち込まないつて言ったら嘘になるけど、んー、自分なりに気持ちを入れ替えて、そう、うん、だから！ 僕を誰だと思ってるんだよ。そう、んじゃ、切るよ、うん。

（また瞬間に場が換わり、別の場面、教育の現場で自分を担当する上の人を追いかけながら。）

男4 ……あの、どういうことですか？ ちよ、待ってください、あの。教育実習に来るなつて？ 今、色々準備してて、いや、えっ、雨、男？ まあそうですけど、そんな、そういうことまで調べて？ 確かに雨男が教師つて、そりや子供たちが可哀相、ですけど、今色々調べて、雨男から抜け出せる方法を。遺伝的にとか、そりや、あの、そうですけど。えっ？ 教育委員会が？ なんで教育委員会が急に出て来るんですか？ 裏でそういう取り決めて、それじゃ、雨男とか雨女とか、教師になるなんて絶対・・・、まさか本当に？ そ、そんな馬鹿な話・・・

（電話の音。男4、瞬間、時間と場所を移動し、スマホを手に。）

男4 うん。ああ、おう。元気だつて、いや本当、まあこの先の事は考えなきゃいけないけど、うん、本当、本当、大丈夫だから、心配しすぎ、はは、僕を誰だと思ってるんだよ。だろ？ んじゃ切るよ。もう、しつこいって本当。じゃね。

(男4、その場から走り去り、空間を一周して、歩調がゆつくりになり、そして座り込む。雨音が聞こえる。それに気づき、空を見上げる。)

男4 . . . まさかね、上昇気流、発生してる？ ははは。なんで、お祭りなんかじゃねーだろうが、バツカか、運動会じゃないし、旅行なんて行かないし、どこにも、どこにも、なんで、なんで降るんだよ？ こんな時に、こんな時に、雨なんて、雨、なんて . . .

(男4、ふらふらと、姿を消す。)

○場面7

(男1と男2。男2が、ロウソクに火がついた小さなケーキを持ってきている。)

男1 . . .

男2 あいつさ、子供が好きだったんだよね。本当まじで。それでずっと学校の先生になるのが夢だったんだよ。それがあの時にさ、子供とか、夢とか、全部絶たれたって。俺、励ましてやれなかった。そういう時に

「雨の世界」

言ってやれる、どんな言葉も俺は持っていないかったんだよ。だって今まで、なんだかんだ言って、俺のがいつに励まされてきたからさ。それがさ、本当、ダメだよな、兄失格だよ。だからさ、せめて、あの子の誕生日にケーキくらいって、そう思いついて。それくらいいいかなって、雨男だけど、小さなお誕生日会、それくらい。そしたらけっこう大変な風になっちゃってさ。でも、そっか、俺だけじゃなくって、あいつの力もあるのかもな、今はもうこの世にいないくっても。雲の上から、クラウド9から直接、じゃんじゃんこの雨降らしてる。

男1 僕、そんなことも知らずに、ここに・・・

男2 そりゃ仕方ないだろ、

男1 でも。

男2 俺だってこの雨で被害者が出たら困っちゃうしな。

男1 ああ、なんか、本当すみませんでした。

男2 だからいいって。雨、きつとまだじゃんじゃん降るんだろうな、なあ、このあと一杯付き合ってくれん
だろ？

男1 えっ、でも。

男2 どうせ今出たりしたら死ぬかもしれないしな。

男1 ああ、あ、ありがとうございます。

男2 それとき、このローソク、一緒に消してもらおっかな。

男1 えっ？

男2 このまんま点けといてもケーキだめになっちゃうし。

男1 ああ、はい。

男2 んじゃ、こっち来てこっち来て、せーのでいくぞ。せーの。

(2人、同時に息を吹いて、ローソクの灯を消す。
それと共に暗転。)

○場面8 — エピローグ —

(並んで椅子に座っている男2と男3。しばし、二人ともスマホをいじってる。)

男3 あのさ、スマホいじるのやめない？

男2 そっちこそ。

男3 せっかく久々に会ったのに。

男2 そうだな、久々。

男3 元気だった？

男2 まあまあ。 そっちは？

男3 ー、普通。

男2 じゃさ、同時に、せーのでスマホやめない？

男3 いいよ。

男2 いくぞ、せーの。

(二人共まだスマホいじってる。一拍置いてから)

男2 ってやめないじゃん。

「雨の世界」

男3 そっちこそ。

男2 ちようどイベント始まつちやつて。

男3 ゲームかよ。

男2 そっちこそラインばつか。

男3 既読スルーすると面倒くさいんだよ。

男2 誰？ どうせ僕以外友達なんかいないくせに。

男3 そ、そんなこと。それに友達未満、知り合い以上みたいなのが一番面倒くさいんだぞ。

男2 よし、勝った！

男3 じゃ、僕もやめよ。

(二人共、スマホ、やめる。)

男3 で、なんだっけ？

男2 楠が呼び出したんですけど。

男3 ああ、そっか。

男2 元気だったのか？

男3 それさつき返事した。

男2 まあまあ、だっけ。

男3 それ丈一郎の方。

男2 えっー。

男3 僕のは普通。

男2 同じじゃん！

男3 まあ似たようなもんだけど。

男2 あーあ、新婚だしな、どうせ幸せいっぱいなんじゃないの？

男3 それこそ普通だよ。付き合い古い奴と一緒にいるって変化が少ないって言うか。

男2 ああ、そっか。

男3 それにもう新婚じゃないらしいよ

男2 ん？

男3 賞味期限って知ってる？

男2 賞味、期限？

男3 新婚の。

男2 そんなものがあるのか！

男3 10日。

男2 短っ！

男3 世間的には半年とか、1年とかあるイメージだけど、家庭の中では冷蔵庫で10日間がいいとこだつて。

男2 ー、結婚の幻想打ち砕いてくれてありがとう。

男3 丈一郎こそさ、今落ち込んでるんじゃないのか？

男2 ん？ まあ、そりゃね。

男3 僕、出来ることならなんでもやるよ、踊ろうか？

男2 お前が踊って誰が喜ぶよ。

男3 そうだけど、なんかしたいからさ。

男2 ありがとう。でも遠慮しませう。

男3 そう？ 踊って欲しくなったらいつでも言うてね。

男2 じゃ、万が一気が触れてそんな気になったらな。

男3 うん。ああ、あの、ごめんね。

男2 ん？

男3 ほら、結婚式、呼ばなくって。

男2 ああ、仕方ないだろ、雨男に生まれた男の運命って諦めてるよ。

男3 ああ、うん、いや、そうじゃなくってね、そういうことじゃなくって。

男2 なんだよ。

男3 うん。僕やつぱ来て欲しかったって思ってたんだよね。友人代表って言ったらお前しかいないしき、丈一郎には祝って欲しかったんだよな本当は。なんか、感動して、悔しがってかもしれないけど、泣いて欲しかったし、スピーチとかでき、目頭熱くなるようなお祝いの言葉とかも良かったって。結婚の間、実はずっと丈一郎がいないことが気になって、なんだか集中できなかったって、聖子には言えないけどさ。やつぱ呼べば良かったなって、料理で出てきた海老フライ見たら、すんごい思ったの。思っちゃったんだよなあ。

男2 なんだよ、今更。

男3 分かってるって、今更なのは、でも、って話。

男2 でも雨降らなくって良かっただろ。

男3 曇り。

男2 曇り？

男3 青空ではなかった、ずっと曇ってて。

男2 ビミョー。

男3 そうなんだよ。でも自然現象なんだからさ、そういうこと、天気なんて、どうせ思い通りになんかならないんだから、所詮ね。

男2 そうだけど。

男3 そういうことだよ。だって今日なんて、むっちゃ晴れてるし

男2 そうだな。実は今日さ、楠と会うからなんかヤバいんじゃないかってすげー心配してて。

男3 心配？

男2 すげー降ったりして。

男3 えっ、なに言ってるんだよ、「ハレ」じゃなくって「ケ」だろ。

男2 「ケ」？

男3 仲の良い友達同士がお喋りって、それただの日常じゃん。

男2 ……、あつそつか。

男3 ……、そうだよ。

男2 ……、仲の良い友達だって。

男3 えっー、繰り返し返すなよ、そういう単語はさ。

男2 ははは。じゃ、どうする、どっか、スタバとか行く？

男3 スタバ？ 似合わねー。

男2 喉乾いたし。

男3 スタバじゃお前飲むもんじゃないじゃん。

男2 ブラックなら飲めるよ。

男3 それスタバの意味ないし。

男2 えっー、んじゃビールにでもする？

男3 おっ、真昼間から。

男2 たまにはいいだろ。

男3 よし乗った。行こう行こう。

男2 実は俺今、すごい口が焼き鳥になってて、どっか店知ってる？

男3 おつ、僕を誰だと心得る、いくらでもこの辺の焼鳥屋なら、あつ、丈一郎今雨降らせらんない？

男2 何で。

男3 雨の日割引がある店知ってるけど。

男2 おつ、じゃ頑張ってみる。（*ポーズ）

男3 何それ。

男2 弟がやってたポーズ。

男3 えー、それ効果あるの？

男2 さあ、分かん。

男3 ははは。行こう。ちよつと歩くけどいいだろ？

男2 ああ。

（男3が先に行く。男2もついて行くが。立ち止まり、振り返り、空を見上げる。）

男3（声）・・・おい！

男2 ああ。

（男2、男3を追いかけ、去る。誰もいない空間。しばらくして、雷が小さく聞こえ、青空には雷雲が開始めるかもしれない。）

街に流れる、なんかいい感じの音楽の中、舞台、暗転。）

終わり。

初稿・2022年9月5日*雨々アメ(仮)メ
改訂版・2023年4月15日*雨々アメ(仮)メ

*チラシ提供・SPRAL MOON (デザイン・印田彩希子／画・秋葉陽子)

発行◎ウテン結構 utenketkoh@gmail.com
上演に関するお問い合わせは、
rakuenoh20@gmail.com (長堀博士)まで
お願いします。演出に関する質問にもお答えいたします。